
神様からのお手紙（承一）

よぞ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

神様からのお手紙（承一）

【Nコード】

N7512B

【作者名】

よぞ

【あらすじ】

春休みのある日、僕の元に一通の手紙が届いた。真っ白い封筒に僕の名前だけ書かれた手紙。それは、僕の願いを叶えてくれるという、神様からの手紙だった……！「起承転結」作品です。これから（承二）finoさん、（転）神崎さん、（結）チャモさんと物語は続きます。

(前書き)

これは、「グループ小説」第十二弾、「起承転結」企画です。

神様からのお手紙（承一）

神様からの手紙（承）

とりあえず部屋に戻った僕は三人の写真と向き合っていた。

うーん、この中の誰かと付き合えるって言われてもなあ……。

うーんうーん、と唸りながらも顔は自然とにやけてしまう。時々でへっ、なんて声まで漏れてしまう始末。でへっ。

しかし神様が提示してきたルールもある。場合によっては杞憂に過ぎてしまう場合だって考えられる。

（まずは状況整理かな）

大まかにルールは二つ。

一、三人それぞれに僕という人間をアピールすること。

二、選んだ一人が提示する金額よりも、僕の提示した金額の方が多いこと。

これだけだ。

とりあえず一番目のルールが難関だ。

水野さん、伊集院さん、北嶋さん、ほとんど会話もしたことがない女子三人にどうやって僕をアピールすればよいのか？

しかも学校も休みなので、会う確立はぐんと減る。うーん……でへっ。

（よし、こういう場合はできることからやっつけていこう）

そつだそつだ。一番目が難しいなら二番目だ。

これは自分で払える範囲内では提示できないのだから、手持ちのお金を増やすことが大事なんだ。

今、手持ちのお金は6,510円。微妙だなあ。

と、部屋の隅にある漫画とゲームソフトが目に入った。小学生の頃から集めた僕の大事な宝物達。これを売れば……。

いや！ そんな無理やり相手より高い金額を提示してまで付き合いたいだなんて、男として、人間として間違っている！ 相手にゼ

口円という金額を提示させるぐらいでなくはいけなはずだ！
それはそうと、最近部屋が狭くなってきたので漫画とゲームソフトは売ることにした。お金が欲しかったわけでは全然ないが、手持ちは21,510円になった。

漫画を売った帰り道、僕はポエムを創作しながら指先の運動をしていた。

もっとわかりやすく言えば「一円でも多く、一円でも多く」と呟きながら自動販売機のおつりのところを探り歩いてきた。

すると通りすぎりのおばさんが「負けないで」と千円札を握らせしてくれた。ふむ、僕の芸術活動への寄付だろうか。お金なんて欲しくないが、気持ちとして受け取っておこう。しょうがないなあもう。

「よお翔太。何してんの？」

「ああ、田中太郎くん。いや、ちよつと漫画本を売りに行つててさ」
何でフルネームで呼ぶんだよつ！ 田中太郎くんの心からの叫びが返ってきた。彼はスポーツ万能で成績もよく、顔もまあまあで身長が180センチもあるという素敵な男性だ。しかしお茶目な両親がつけた名前だけがコンプレックスだった。

「すまん、田中太郎くん。悪気しかないんだ、許してくれ」

「許せないだろそれっ!？」

「それで田中、太郎こそ何してるんだ？」

「ちよつと区切ってるけどフルネームだよねっ!？」

相変わらず田中の突っ込みは激しい。こいつなら良い芸人になれるぞ。

「……ふう、これから皆と映画を観に行く約束してるんだよ。翔太も行くか？」

ガッ!

僕は田中の首筋を掴み上げた。といつても首に手を届かせるのでやっとならしたが。

「田中太郎よ……今の俺に映画等という現実逃避に払う金があると

本気で思っているのか？」

「は？ …… ちょ、え！？」

あまりの状況に戸惑いを隠せない田中、構わず一喝してやった。

「貴様はアンパンマンに顔が欠けたまま戦えと言っているんだ！！
見た目的にも実力的にも色々まずいだろうがっ！！」

愚か者が、と盛大に舌打ちして手を離れた。神様がくれたこのチャンス、絶対に見逃すわけにはいかんだ！

「ごほっ …… わ、わからんがお前が何かに命を賭けていることは理解した」

「十分だ、友よ」

「しかしお前、内気で真面目な奴だったはずじゃ ……」

シヤラップ！ 友達の前では本来の姿に戻る、それが本当のシヤイボーイだと思う！

「とにかく、俺は映画などには行かん。じゃあな」

そうさ。早く三人へのアピール方法を考えなければいけないのだから。

と、田中と別れてから三分後、僕は唐突に映画が大好きになった。もう愛しおしくて仕方がない。この胸の鼓動、まさにLOVEだよ！

「そういうわけで、田中太郎くん。僕も映画に行きたいです」

「どういうわけで！？ さっきあれほど全力で断ったのに ……」

もちろん、北嶋萌がメンバーの中にいるという事実とは関係なく映画を愛しているからだ。

「いや、よく考えたんだが、友達より大事なものはないからさ」

見てっ、見てよ萌ちゃん！ 僕のこの美しい友情を！

「翔太くんも、好きなんだね、『怨霊たちの血しぶき祭』」

…… 何それ？

萌ちゃん、小柄で華奢でおっとりしていて、とつても女の子らしくて可愛い萌ちゃん。そのセレクションは一体 ……。

「いや、俺達は嫌だったんだけどさ …… 北嶋が」

「何よー、田中くん達も観たいって言つてたじゃないー」

「しよ、少々衝撃的な趣味だったが、これぐらい無問題！ 萌ちゃんの可愛らしさにはヒビすら入らないさ！」

「いこう！ いやー、俺も怨霊の血しぶきが大好きでさー」

「あ、翔太。まだ健太が来てないんだけど」

「む、まだ人がいたか。しかしまあ確かに。田中と萌ちゃんだけではデートになってしまうしな。しかしこれ以上余計な人員は不要！

「健太ならさつきダンプカーに轢かれていた」

「ええっ!？」

「次に皆と会えるのは来世だ」

「健太死んだのかよっ!？ 映画どころじゃないよっ!？」

「大丈夫、知り合いの霊媒師に連絡しといたから」

「お前の友達関係どうなってるの!？」

「つていうか霊媒師じゃ被われちゃうよ！ 田中の切れたつつこみをよそに、萌ちゃんは映画 映画 とスキップで映画館に向かい出した。

さすがスプラッター趣味なだけはある。動じないとは……。

映画は物凄い内容だった。

最初のシーンから主人公が惨殺された。次のシーンではヒロインも肉片に変えられてしまい、映画が半分すぎる頃には登場人物の全てがいなくなつた。後半は怨霊達の日常生活を描いたホームコメディ映画に路線を変更し、涙あり笑いありで場内を沸かせていた。

家出していた怨霊のチャイリーと元殺人鬼の霊、ガーヴィンの和解のラストシーンは涙なしでは見られない。また、スタッフロール終了後に最初のシーンで殺された主人公が実は死んでいなかったと明かされた事にも度肝を抜いた。

「あー、面白かったー」

田中が白目を向いている!？ 返つて来い田中!!

「ど、どこが一番楽しかったかな……萌ちゃん?」

「うーん、たくさんあるけどー、やっぱり寂しさを紛らわすためにチャイリーがニューヨーク市民の三分の一を呪い殺すシーンかなー」

「ああ、あれで世界は大混乱に陥ってたね……」。

「ああ、ラストシーンもよかったよねー？」

「萌はいまいちだったよー。前作の、和解と見せ掛けて懐に忍ばせていたナイフでぶすつといったラストシーンの方がよかったもん」
前作あつたんだ……」。

田中はあまりの内容に今だ目を覚まさない。ん……これはチャンスか！？

「なんか田中はここに残ってもう一巡観たいって言うてるからさ、二人で喫茶店にでも行こうか？」

「いいよー、田中くんも気に入ってくれたんだねー」

出ていこうとする僕の足に、無意識に田中の手が掴みかかってきたが、僕はそれを踏みつけて映画館を出た。

もう一度感動のラストシーンまで観ていけ田中！

「も、萌ちゃんの好きな男のタイプってどんなのかなー？」

さつきまでは平気だったのに、二人きりになると急に恥ずかしくなった。だってこれは……まるでつきりデートじゃないか！

「うーん、ガーヴィンみたいな人は好みかなー」

それは一度死んで蘇らないといけないデスカ！？ 無茶な！

「やっぱり一度死んでるくらい人生経験がないとー、あ、パフェおかわりくださいー」

たぶんこの世にはいないよ、そんな男……」。

萌ちゃんは可愛い笑顔で10杯目のパフェを食べている。いくらでもおごるからね！ と言ってしまったことを後悔していた。財布の中には20・010円残っているから払えないことはないけど……、三日後に払える金額が減ってしまう……」。

「あはは……。萌ちゃんはよく田中達とは映画とか観に行くの？」

「うん。春休みの前に誘われたの。男の子と遊んだのは初めてだよ」

とっ………という事は！？ 僕が萌ちゃんの初デートの相手！？
かつ、神様………！ 金にがめつい神様、ありがとうございます！
「翔太くんってー、楽しい人だったんだねー」

「………へ？」
「だってー、教室じゃいつつも一人で小説とか読んでるでしょー？
あんまりおしゃべりもしたこともなかったし、意外だったなー」
これは………！ もしかして好印象！？

「じゃ、じゃあもしかしてー………今日は萌ちゃんに僕をアピールすることができた、かなーなんてー！」

あはっあははは………！ 何言ってるんだ僕は。

「できたできたー。もー大アピールだよー」

一人目クリアーじゃー！ー！ー！

もー、萌ちゃん可愛いー！ー！ー！ こりゃ決まりですよ神様
！ 萌ちゃん決定ですよーい！ でへへっ。

その時萌ちゃんの携帯が鳴った。

「あ、もしもしー、あれ？ 健太くん？ ダンプに轢かれたんじゃー………、あ、うん。ごめんねー。うん、うん、わかったあー。また今度ねえー」

と、電話を切る。

しばしの沈黙。萌ちゃんは俯いて何も話さない。

「あの………今の電話って………？」

「健太くん………蘇ったんだ………」

好みの男性キターー！ー！ー！ー！ー！ー！

違っっ！ 健太は死んでなんかいないよっ！？ 冗談だからねっ

！？

「あのね萌ちゃん………！」

「なんだろうこの胸のトキメキ………！ ねえ、何だろう翔太くん………」

「こっ……こっ……こっ……！」

「こけっこっこおー……！！！！！！」

「……恋じゃ……ないかな……」

「恋……かな」

僕の馬鹿野郎！ 何も相手の肩を持つことないじゃないか。でも、萌ちゃんがあんまり嬉しそうだったから……。もつと喜んだ顔が見てみたいなって思ってしまったから……。

「よかったね、萌ちゃん。今度は健太と二人で映画にいきなよ」

「うん。ありがとう翔太君。優しいねー」

へへつと、笑う萌ちゃん。僕の胸のときめきは、やっぱり嘘じゃなかったみたいだよ。でも、君が幸せになるなら一生隠しとおしてみせるからね。

二人で喫茶店を出た。

ありがとうございましたー。と店員さんが明るい声で言った。

僕の気持ちも知らないで。なんて自分勝手な悪態を心の中でついていた。

じゃ、またねー。

ばいばい。

駅前で萌ちゃんと別れた。手持ちのお金は12、312円になっていた。

財布の中身も、心の中も、なんだか寒いぜ畜生……。

すっかり日も暮れ、やたら薄暗い街灯が灯る住宅街の道を歩き、家路についた。今日一日で色んなことがあったなあ……。せつかく憧れの萌ちゃんと仲良くなれたのに、その日に失恋するなんて……はあ。

ため息をついたのと同時に、ポケットの携帯電話が鳴った。

「ん、登録外か……誰だ？ はい、一色です」

「あ、一色君？ 水野ですけど、わかる？」

水野さつき！？ わかるに決まっている！ 憧れの三人のうちの一人だもの！

「えええ、ど、どうして僕の番号を？」

「ごめんね、さっき萌ちゃんに聞いたの。なんか凄いいい人なんだよ」。って電話口ですごいアピールされちゃって」

萌ちゃん……！ 天使だ君は！

「それでね、いきなりこんなこと言うのも変なんだと思うんだけど

……」

えっ、えっ……告白!？」

「なにな何!？ 何でも言っ!？」

心臓が爆発しそうだった。足がガクガク震えているのがわかる。

「あのね……助けてほしいの」

「へ？」

その時、僕は水野さんの声が少し震えていた事に気がつかなかった。

(後書き)

路線は当然のごとくコメディへ。

でも次のfinoさん(承二)次第ではまだまだどうとでも転がります！

バトンはお渡ししました！ 頑張ってください！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7512b/>

神様からのお手紙（承一）

2009年7月3日19時02分発行